

質料変換と生産的労働

渡 辺 雅 男

序 マルクスの質料変換概念

(97) 質料変換と生産的労働

本稿の目的は、マルクスの質料変換(Stoffwechsel)概念⁽¹⁾の整理を通して、物質的労働と生産的労働の関連を問うことである。『資本論』においてマルクスもいっように、「生産的労働の本源の規定は、物質的生産そのものの本性から導き出されたものである」(Marx Engels Werke [MEW], Bd. 23 I, S. 531—532。以下、引用が『資本論』からの場合、引用文末尾に巻数、原書頁数の順で、たとえば I, S. 531—532. と略記する)。そこで従来、生産的労働論において、この本源の規定はなによりも物質的労働としての生産的労働を明らかにする規定として取り扱われてきた。しかし、非物質的な精神労働

の規定、また質料的生産物を直接生産しない場合のサービス労働の規定等を考えるとき、この本源の規定は従来以上にたちいった考察を必要とする。『資本論』第一部第五章の記述からも理解されるように、そもそも労働が物質的であるか否かの違いは、労働過程が質料変換を媒介するか否かの差にあると思われる。したがって、物質的労働が遂行するこの質料変換の過程を明らかにし、それをもとにして物質的生産と物質的労働の関係を再検討することは、生産的労働論がますますって解決しなければならぬ課題であるといえよう。以下、本稿では『資本論』の記述に即して、この課題に取り組んでいきたい。⁽²⁾ところで、一八五〇年代後半以降マルクスの文献に散見される彼の質料変換概念が、『資本論』で、つぎの

ような三重の意味をもって使用されていることは、従来看過されてきたように思われる。⁽³⁾つまり、(一)「自然的質料交換」、(二)「人間と自然との質料交換」、(三)「社会的労働の質料交換」または「社会的質料交換」。まず、これらの質料交換の概念を明確化し、かつそれらの相互関連を明らかにすることが必要である。

しかし、その際、Stoffwechselを「物質代謝」という訳語のもとに現代の自然科学の常識に照らしてその内容を直接推断することには危険がある。なぜなら、今日の生物学の通説と当時のそれとのあいだには、質料交換を有機的自然にのみ特有な運動法則と認める(オパーリン)⁽⁴⁾のか、それとも有機的自然のみならず無機的自然にもその存在を認める(エンゲルス)⁽⁵⁾のかという点をめぐって大きな乗離が認められるからである。

むしろ、別稿でも明らかにしたように、質料交換を自己の物質論の基底に据えて独自の唯物論を提唱したモリスロット(Moleschott, Jac.)、ユヒナー(Büchner, L.)等の見解が、彼らとマルクスの方法論上の決定的相違⁽⁷⁾にもかかわらず、当時の質料交換概念を知るうえで直接的な手がかりを与えている。⁽⁸⁾つまり、彼らは質料と

力とを物質の相異なる二属性と考え、物質の運動(「循環運動」)をこの両属性の交換(「質料交換」と「力の交換」)の相関関係のうちでとらえ、質料交換は力の発現によってひきおこされるものであること、また逆に、力が創造される過程の背後には、そうした力を創造するならかの質料交換のあることを主張したが、このような考えはマルクスにも影響を及ぼしたと考えられるのであり、マルクスにとって質料交換をひきおこすものこそ自然力と同時に労働力でもあったのである。

他方、マルクスが質料の形態変化と労働との関連を論じた際(L. S. 58)に「質料の形態変化」を「宇宙のあらゆる現象」のうち認めたヴェリ(Verril, P.)を用していることから類推されるように、マルクスにとっても「質料の形態変化」が質料の一般的变化(物理的・化学的・生理学的変化)を意味していたことは明らかである。この点では、シュミットのように、「マルクスにとっても質料の形態性は、質料が一般的法則に従属することと同意義をもって⁽⁹⁾いる」ということができる。さらに、質料交換も一般的運動法則に従属した質料の一般的变化を意味するものであるのだから、質料の形態変化は

質料交換と同じ内容を意味する別様の表現であるといえよう。

- (1) 梯明秀、芝田進午の両氏はこの概念を無機的・有機的・人間的自然という自然史の発展段階に正しく位置づけている。しかし、われわれはマルクスに即することによって、自然史と人類史との対比のなかでこの資料交換概念を考察してみたいと思う。(梯明秀『物質の哲学的概念』五三頁、芝田進午「マルクス主義における自然と人間」、古在他編『講座マルクス主義哲学』第一巻所収、一一四—一七頁)
- (2) 一八五六年六月二日付イェニエー宛書簡、一八五八年三月五日付エンゲルス宛書簡。
- (3) たとえばシュミットにしても、彼は「自然的質料交換」を顧慮しながら (A. Schmidt, *Der Begriff der Natur in der Lehre von Marx*, S. 78)。
- (4) オバーリン、江上訳『生命の起源と生化学』、岩波新書、四一六頁、四二—四三頁。
- (5) エンゲルス『自然弁証法』(MEW, Bd. 20, S. 560) 同『反デュリーニング論』(MEW, Bd. 20, S. 75)。
- (6) 拙稿「自然科学的唯物論者の物質観——ビュヒナー・モレスコットを中心に——」、『一橋研究』二巻四号、昭和五三年三月。
- (7) 前掲、拙稿、一二六頁。
- (8) 椎名重明教授はその著書『農学の思想——マルクス

とリービッチ』東大出版会、二〇四—二一〇頁)で人間と自然の質料交換を人間と土地の質料交換の意味にもつぱら解釈し、マルクスの質料交換概念への影響をリービッチに求めたうえで、モレスコットの影響を問題にするシュミットは誤りであるとされる。だが、この場合でも質料交換の諸過程がもつ全体的関連は明らかにされてはいない。

(6) A. Schmidt, a. a. O. S. 93, Fußnote 2. シュミットは同箇所でのつぎのようにも言っている。「加工されるべき自然質料の自己規定性を特徴づけるために、しばしば成熟期マルクスによって使用された形態概念は、哲学的にはアリストテレスに、またフランシス・ベーコンの形相説にさかのぼるものであろう。」

一 自然的質料交換

先に挙げた質料交換の三過程のうち、自然的質料交換はあくまで自然過程を意味し、基本的には自然史の段階に属す。これにたいし、人間と自然の質料交換も社会的質料交換も、人類史に属し、つねに有用的な人間的・社会的過程であるといえる。人類史の起源が自然史のうちに求められるなら、自然的質料交換こそ、質料交換の発展にとり根源的である。そこでまず、自然的質料交換をとりあげ、それを「人間そのものの自然と人間をとりま

く自然」(I, S. 535) の二つの自然領域で運動する過程として考察してみたい。

(a) 「人間をとりまく自然」における自然的質料交換
 一定の熱エネルギーが支出され、それによって「水がその凝集状態を変じて蒸気になる」(III, S. 656) ような場合には、自然力の発現が自然的質料交換(水から蒸気への形態変化)を媒介している。もし、この反応が逆になれば、自然的質料交換(蒸気から水への形態変化)が逆に自然力(熱エネルギー)を遊離(放熱)する。さらに「燃焼労働」(II, S. 132)の例のように、自然力Aを創造する自然的質料交換を過程させるために、別の自然力Bの発現が必要であるなら、全過程が創造する自然力はA+Bであって、A+Bではなく。ともあれ、自然力と自然的質料交換の相互媒介性には、このように、前者が後者を媒介する過程と、前者が後者によって遊離(創造)される過程との二つの場合がある。

この両過程は、人間にとりなんらかの有用性をもつ場合と、非有用性をもつ場合とに分かれ、さらに有用性(非有用性)が自然力の発現にあるか、それとも自然的質料交換にあるのかに応じて区別されるから、自然過程

はつぎの四種に分類されうる。①有用的な自然力を創造する自然的質料交換の過程、②有用的な自然的質料交換を自然力が媒介する過程、③非有用的な自然力を創造する自然的質料交換の過程、④非有用的な自然的質料交換を自然力が媒介する過程。

有用的な自然過程(①および②)では、労働によらず有用性が創造される。水力エネルギーを創造する「落流」は①に属し、この場合、「自然質料は別として、……自然力が作用者として、……生産過程に合体されうる」(II, S. 356)。これにたいし、「たとえば、畑にまいてある穀物、穴倉で醗酵しているぶどう酒、いろいろな製業たとえば皮なめし業などの労働材料で化学的過程にまかされてあるもの」(II, S. 125)などは、②に属し、「労働対象は……自然過程のもとに置かれていて、物理的、化学的、生理的諸変化を経なければならぬ」(II, S. 241)。

他方、非有用的な自然過程(③および④)には、その極限に「異常な自然現象や火災や洪水など」(II, S. 178)という破壊力としての自然力や、腐敗・腐食という「自然的質料交換の破壊力」(I, S. 198)が含まれる。もち

ろん、生産的労働はこうした非有用性にとらえられた自然質料の無目的消耗を合目的消耗（消費）に変えることができる（I, S. 198）が、破壊力は、それ自体が有用性に転化しないかぎり依然として有害である。

だが、自然過程の非有用性から有用性を導きだし、「有用な質料の数をふやし、……質料の利用を多様化するだけでなく……（廃物の再利用によって）新たな資本質料を創造する」（I, S. 632）ことは、「歴史的行為」（I, S. 50）に属す。有用性の創造と区別される、有用性そのものの発見は、非物質的な科学的労働の成果である。

(b) 「人間そのものの自然」における自然的質料変換
そもそも「人間自身も、労働力の単なる定在として見れば、一つの自然対象であり、たとえ生命のある、自己意識のある物だといえ、一つの物であって、労働そのものは、労働力の物的発現である」（I, S. 217）。しかも、「労働力なるものは、なによりもまず、人間有機体に転換された自然質料である」（I, S. 229, 注二七）のだから、「労働力、したがって人間の自然力」（III, S. 821）の評価に際しては、グローブ（Grove, W. R.）のいうように、「ある人が二四時間中行なった労働の量は、その

身体に生じた化学変化を検査することによって、ほぼ確定することができるであろう。というのは、物質における形態の変化は、それに先行する運動力の使用を指示しているからである。」（I, S. 549, 注一四）

人間有機体の内部での自然的質料変換が、一方で労働力を創造するとすれば、他方で質料変換の結果は「消費の排泄物」を生みだす。ここで「消費の排泄物というのは、一部は人間の自然的質料変換から出てくる排泄物のことであり、一部は消費対象が消費されたあとにとっている形態のことである」（III, S. 110）。だから、生活手段である自然質料が人間有機体の内外で「消費の排泄物」にまで形態変化することこそ、その過程で労働力を創造する人間の自然的質料変換であるということができよう。

二 人間と自然とのあいだの質料変換

人間と自然とのあいだの質料変換は労働過程を場として行われるが、この過程は、(a) 質料の形態変化⇨質料変換（労働対象の労働生産物への転化）と、(b) それをひきおこす力の発現（労働力の発現⇨労働）、さらに(c) 労働手

段による両者の媒介という三つの運動局面に分かれる。

(a) 労働過程における客体的契機の運動——質料交換の過程——

労働過程で労働する主体が自己にたいし客体として措定する労働対象は、なんらかの形態をもつ質料である。しかも、「人間は、その生産において、自然そのものと同じようにふるまうだけ、つまり質料の形態を変化させることができるだけである」(T. S. 57) から、こうした働きかけにより労働対象が労働生産物へと転化する過程は、質料の形態変化つまり自然的質料交換の過程であるといふことができる。

しかし、労働過程が使用価値を生産するかぎり、換言すれば「形態変化によって人間の欲望に適合するようにされた自然質料」(T. S. 195)を生産するかぎり、そこでは、質料のたんなる形態変化にとどまらず、その有用的形態変化が行われている。

このことは、質料の形態変化(質料交換)が有用性を獲得したことを意味し、自然的段階を支配する運動法則である自然的質料交換が人類史的段階を特徴づけるような質料交換(人間と自然とのあいだの質料交換)へと

転化したことを意味している。

(b) 労働過程における主体的契機の運動——質料交換を媒介する労働——

「労働そのものは労働力の物的発現である」(T. S. 217)以上、主体的契機の運動としてみれば、労働過程は労働力の発現過程である。

「人間が自然質料そのものにたいして、ひとつの自然力として対応する」(T. S. 192)かぎり、労働力はまづなによりも自然力であり、自然力としての労働力の発現とは、「じぶんの肉体に属する自然力である腕や脚や頭や手を運動させる」(Ibid.)ような労働力の生理的支出のことである。

しかし、「多少とも発達している」(T. S. 59)なら、人間労働力の発現は、労働の生理的支出にとどまらず、「人間の脳や筋肉や神経や手などの生産的支出」(T. S. 58)——傍点引用者)となる。

自然力の発現としての労働(労働力の生理的支出)と人間労働力の発現としての労働(労働力の生産的支出)とを区別するもの、つまり人間にのみ独自の労働を特徴づけるものは、労働の際の「合目的意志」(T. S. 193)

である。だから、「労働力の物的発現」が合目的的意志を伴うときにかぎり、労働力のたんなる生理的支出が質料のたんなる形態変化をひきおこすばかりではなく、つまり自然力の発現が自然的質料交換をひきおこすのではなく、労働力の生産的支出が質料の有用的形態変化をひきおこし、つまり人間労働が人間と自然とのあいだの質料交換をひきおこすのである。

(c) 労働過程における主体化された客体的契機の運動——労働が質料交換を媒介するための条件——

労働手段は労働する主体の「能力手段」(T, S. 194)として、主体の姿を延長することのできる客体的器官〔諸物〕である。

「労働者じしんの肉体的諸器官だけが労働手段として役だつ」(T, S. 194)のような場合、あるいは「自然的なものそれ自身が労働者の活動の器官、すなわち彼が彼の肉体的諸器官につけ加えて、彼の自然の姿を延長する器官となる」(Ibid.)のような場合、問題とされているのは、どちらも天然に存在している、本源の意味における労働手段である。

だが、「およそ労働過程がいくらかでも発達していれば、すでに加工された労働手段を必要とする」(T, S. 194)。

こうした労働手段こそ「特殊人間的労働過程を特徴づけるものである」(Ibid.)から、このような労働手段の発展は、人間的労働力が人間と自然とのあいだの質料交換(質料の有用的形態変化)を高度に発達したかたちで媒介するための不可欠の条件をなしている。

(d) 労働過程の社会化

個別的労働過程が社会化され、社会的労働過程へと転化することによって、労働過程を構成する二つの運動局面——労働と質料交換——も社会化される。それとともに、二つの運動の「伝導体」(T, S. 195)として役だつ労働手段も、その社会的性格を発達させる。

労働の社会的形態の発展は、協業・マニユファクチュア的分業・機械制大工業という道筋のなかに現われる。協業では「結合労働の効果」(T, S. 345)が、マニユファクチュア的分業では「手工業活動の分解」(T, S. 386)が、そして大工業では「労働の交換」(T, S. 511)が各段階を特徴づける労働生産力の「圧倒的自然法則」(Ibid.)であるとすれば、各段階を通じての労働の社会化が労働の結合・分割・交換によって達成されていること

になる。

他方、個別的な質料交換の過程が空間的に集合すれば、たとえ相互に提携しなくても、過程の量的規模は拡大し、過程で運動する質料(労働対象・労働生産物)も一定の社会的規模を有するようになる。この場合には、孤立的で個別的な質料交換過程の結合が現われる。さらに、マニファクチュア的分業では、「生産過程をその特殊な諸段階に分解することが、一つの手工業的活動をそのさまざまな部分作業に分解することとまったく一致する」(I. S. 358.)のだから、質料交換の総過程は無数の段階のないし中間的諸過程へと分割されていることになる。最後に、大工業のもとでは「社会的生産過程の種々雑多な外観上は無関連な骨化した諸姿態は、自然科学の意識的に計画的な、それぞれ所期の有用的効果に応じて体系的に特殊化された応用に分解された」(I. S. 510.)。このような事情が「労働過程の社会的結合をたえず変革する」(I. S. 511.)ものであるなら、このことは、質料交換の諸過程の社会的結合をたえず変革し、諸過程の流動・全面的可動性を条件づけるものといえよう。こうして、質料交換の社会化もまた、その過程の結合・分割・

交換を通じて達成される。

ところで、社会化された質料交換は質料の場所交換(質料の物理的運動)を条件づける。質料交換が純粋に個別的な過程である場合、質料の有用的形態変化の過程は、質料の場所交換を含んでいる。だが、社会化された質料交換の過程は、そのなかの段階的諸過程の間での質料の移動を分離・自立させ、それを生産的消費のための条件とする。

質料交換と労働とが社会化されるにつれ、労働手段もその社会的性格を発達させる。つまり、単純協業では「生産手段の一部分が労働過程で共同に消費される」(I. S. 333.)ことによって「生産手段の充用における節約」(I. S. 344.)という「社会的性格」(ibid.)をうけとり、他方、「労働用具の分化、および……労働用具の特殊化はマニファクチュアを特徴づける」(I. S. 361.)。さらに、「機械体系において大工業は労働者が既成の物質的生产条件として見いだす客観的な生産有機体を有する」(I. S. 407.)ようになり、労働過程の社会化つまり労働と質料交換との社会化は、「労働手段そのものの本性によって命ぜられた技術的必然となる」(ibid.)。

三 社会的質料交換

質料の交換が社会的有機体の内部で行われれば、そこに社会的質料交換が成立する。それは、(a)流通過程にまで延長された(b)追加的生産としての運輸過程を条件とし、(c)特別な労働により遂行され、(d)労働手段の特殊な充用を必要とする。

(a) 商品・貨幣流通と社会的質料交換

使用価値の手持交換を物々交換ないし直接的な生産物交換あるいは反対給付なしのサーピス給付という自然形態にもとづいて行っていた自然発生的共同体では、「時がたつにつれて、労働生産物の少なくとも一部分は、はじめから交換を目的として生産されなければならなくなる」(I, S. 103)。商品交換の開始とともに、生産物交換は商品の姿態交換によって媒介されなければならなくなる。だから、「商品(W)―貨幣(G)―商品(W)、その質料的内容から見れば、この運動はW―W、商品と商品との交換であり、その結果においては過程そのものが消失するような社会的労働の質料交換である」(I, S. 120)。それとともに、「商品流通では、商品交換が直接的生産物交換

の個人的および局地的制限を破って人間労働の質料交換を發展させ」(I, S. 126)。他方、貨幣流通はこうした商品流通を媒介するにすぎないから、「貨幣流通の迅速さにおいては……質料交換の迅速さが……現象し、貨幣流通の緩慢さにおいては、……質料交換の停滞が現象する」(I, S. 134)ようになる。

このような商品・貨幣流通がひとたび資本に從属すると、商品・貨幣は「産業資本の実存形態としてのみ実存し、産業資本に合体される」(II, S. 114)。だから、「W―G―Wは、資本の流通形態としては、機能的に規定された質料交換をふくむ」(II, S. 78)ようになり、たとえば、「形態転化W―Gでの滞留は、資本の循環中で行われなければならない現実的質料交換を妨げ、資本がさらに生産資本として機能することを妨げる」(II, S. 140)。つまり、「社会的労働の質料交換」は社会のあらゆる流通面の背後で過程している。

ところで、こうした「社会的労働の質料交換」では、「生産物交換、社会的労働がそこに現われているいろいろな質料の交換が、ここでは運動の内容をなしている」(I, S. 164)。この表現では、社会的な生産物交換が対象

化された社会的労働という観点から把握されている。社会的生産物が労働生産物であるかぎり、社会的な生産物交換は、社会的労働が対象化された質料の持手交換を実現し、「社会的労働がそこに現われているいろいろな質料の交換」つまり「社会的労働の質料交換」を実現する。しかし、同じ過程を対象化された労働の観点からではなく、質料の観点から把握し直すなら、「交換過程が諸商品を、それらが非使用価値であるところの手から、それらが使用価値であるところの手に移すかぎりでは、この過程は社会的質料交換である」(I, S. 119.)と表現することも可能である。社会的生産物は社会的に有用な形態をもった質料なのだから、社会的な生産物交換は社会的な質料の交換、つまり「社会的質料交換」を実現するのである。このように、社会的生産物を労働生産物としてみるか、それとも社会的に有用な質料としてみるかによって、社会的な生産物交換も「社会的労働の質料交換」として、あるいは「社会的質料交換」として、二様に表現することができる。しかし、社会的な生産物交換には、労働生産物のみならず自然生産物(社会的労働がそこに対象化されていない自然質料)もまた入ってゆくのだか

ら、「社会的労働の質料交換」は必ずしも「社会的質料交換」の全過程を表現したことにしなければならない。したがって、社会的有機体の内部での全質料(労働生産物と自然生産物)の持手交換によって実現されるのは、むしろ「社会的質料交換」として表現すべきであろう。

(b) 社会的質料交換の過程とその条件

社会的質料交換が社会的な生産物交換によって実現される質料の持手交換であるとすれば、「この質料交換は、生産物の空間交換を、ある場所から他の場所への生産物の現実的運動を必要とすることもある」(II, S. 150.)。だから、社会的質料交換は質料の「物理的運動」(ibid.)を必要とする場合もあることになる。

「生産物の空間交換」を条件とする社会的質料交換が商品流通によって遂行されるとすれば、商品流通の形態のもとで行われる社会的生産物の質料交換は、「空間における商品流通」である。そして、この「空間における商品の流通、すなわち事実上の運行は、商品の運輸に帰着する」(II, S. 153.)のだから、社会的質料交換の条件である「空間交換」とは、運輸業の販売する「場所変化」(II, S. 60, S. 151.)と同義であると考えられる。

だが、質料のたんなる場所変化であれば、それは質料のたんなる物理的運動であって、自然過程（自然的質料交換）であるにすぎない。社会的質料交換が質料のたんなる形態変化、つまりたんなる場所変化を条件とするのではなく、「消費を意図した場所変化」という有用的効果を生む過程を条件とするとき、それははじめて有用的な物理的運動、つまり有用的な形態変化の過程を条件とすることになる。もちろん、この場所変化＝空間交換には、「一つの生産場所から別な場所への生産物の運輸」(II, S. 151.) と、「生産部面から消費部面への完成生産物の運輸」(Ibid.) との二種の現実的運動が含まれ、前者は生産的消費のため、後者は不生産的消費のために行われるが、いずれにせよ、消費のための質料の物理的運動が社会有機体の内部で自立して営まれる。

ここでは、生産場所と消費場所の本源的一致が崩れている場合の社会的質料交換が問題となっている。生産と消費が空間的にも分離すれば、「物の使用価値はただその消費によってのみ実現されるものであって、その消費のためには物の場所の交換を、つまり、運輸業という追加的生産過程を必要とするかもしれない」(II, S. 151.)。

このことは農工分離による地域的市場の創出によって一般化される。「社会的生産一般の進歩は一方では、地域的諸市場を創造し、交通運輸機関の建設によって位置をつくりだすことによって、差額地代の原因としての位置を水準化する方向に作用するとともに、他方、農業を製造業から分離することによって、いろいろな土地の地域的位置の差別を増加させる、ということとは明らかである」(III, S. 664.)⁽²⁾。

運輸業の媒介する質料交換が有用的であるかぎり、それは「一面では自立的生産部面をなす」(II, S. 153.)。他方、運輸業の質料交換が社会的なものであるかぎり、それは、本来の生産過程からは「区別され」、「流通過程の内部での・かつ流通過程のための・生産過程の継続として現象する」(Ibid.)ものとなる。

(c) 社会的質料交換を媒介する労働

人間と自然との質料交換を媒介し・統制し・規制する労働が本来の（社会的）生産過程で機能する直接的労働であるとすれば、社会的質料交換を媒介し・統制し・規制する労働は、追加的生産過程で機能する追加的生産労働であるといえよう。その場合、後者には運輸労働のほ

か、発送労働と保管労働とを含めて考えることができる (III, S. 299—300)。

これらの労働と直接的労働との区別は、追加的生産労働が直接的生産労働の成果に依存するという点に現われる。「包装労働や輸送労働などの分量は、その活動の客体である商品の分量に依存するのであって、その逆ではない。」(III, S. 311)

(d) 労働が社会的質料交換を媒介するための条件

本来の労働手段は、「労働過程にあるあいだ、生産物にたいして自己の自立的姿態を保持する」(I, S. 218)。これにたいし、社会的質料交換を媒介するための条件である労働手段(たとえば運輸手段)は異なる。「人間や商品は運輸手段とともに旅をする。そして、運輸手段の旅、その場所的運動こそは、運輸手段によってひきおこされる生産過程なのである。」(II, S. 60)

生産過程にたいし自立的姿態を保持するか否かという労働手段の差異は、つぎの点の認識にとり重要である。

「固定資本の質料的担い手である本来の労働手段は、生産的にだけ消費され、個人的消費にはいることはできない。なぜなら、それは、生産物、すなわちその助けに

よって形成される使用価値にははならないで、むしろ、すっかり損耗してしまうまでは、生産物に対立して自己の自立的姿態を保持しているからである。運輸手段は例外である。その生産的機能中に、つまり、その生産部面滞留中に、生みだされる有用的効果である場所変化は、同時に、たとえば旅行者の個人的消費に入りこむ。この場合に彼が使用料を支払うのは、ほかの消費手段の使用に支払うのと同じである。」(II, S. 160)

(1) 質料の物理的運動(場所変化)を質料交換(質料の形態変化)のうちに含めて考えられることの論拠として、つぎの二点を挙げる事ができる。○質料交換が当時、質料の一般的(化学的・物理的・生理的)変化であると理解されていたこと(前掲、拙稿、一三一—一三三頁)。○シュミットがいうように、「マルクスにとっても質料の形態性は、質料が一般的法則に従属することと同意義をもっている」のだから、「質料の形態変化」もまた、質料の一般的变化を表現するものであり、当然そこには質料の物理的運動も含まれていると考えることも可能であること。

(2) マルクスは、資本制社会のもので農業(農村)と工業(都市)の対立が一方で「人間と土地とのあいだの質料交換を攪乱し、……かの質料交換のたんに自然発生的に生じた状態を破壊する」(I, S. 528)こと、しかしまた、他方

で「その質料交換を社会的生産の規制的法則として、また人間の十分な発展に適合する形態で、体系的に再建することを強制する」(ibid.) ことよって、「農業と工業との新しくてより高度な総合の・合一の・物質的諸前提を創造する」(ibid.) ことを語る。これは、社会的分業の対立的形態とその止揚を考えるうえで非常に示唆に富む言及である。

四 質料交換と物質的生産

従来しばしば生産過程と労働過程の概念的区別が明確にされてこなかったように思われる。しかし、生産過程をなんらかの有用的質料交換過程であると定義すれば、人間と自然の質料交換はもちろん、社会的質料交換もまた、さらに有用であるなら自然的質料交換さえも物質的
生産過程を構成することができる。

生産過程が労働過程のみをもって構成されている場合にかぎり、労働過程の一切の契機が生産過程の契機として現象する。だから、労働過程の「全過程をその結果である生産物の立場から見れば、労働手段と労働対象はともに生産手段として現象し、労働そのものは生産的労働として現象する」(I, S. 156)。もちろん、同一時間の労働Ⅱ生産過程であっても、その生産物が「完成生産物」

であるか、それとも「部分生産物」であるかに応じ、前者の場合、労働Ⅱ生産期間が労働Ⅱ生産時間と等しく、後者の場合、労働Ⅱ生産期間は労働Ⅱ生産時間より大きい (II, S. 233)。しかし、どちらの場合であれ、生産時間は労働時間と等しく、生産期間は労働期間と等しい。

これにたいし、自然過程が生産過程に合体された場合、「資本が生産過程にあるすべての時間が必然的に労働時間ではない」(II, S. 241) ことになる。「労働期間と生産期間とは、この場合には一致しない。生産期間は労働期間よりも大きい。」(II, S. 242) そもそも、「生産期間の経過後にはじめて生産物が完成し成熟する」(ibid.) のだから、完成生産物の産出のためには、「労働時間をこえる生産時間」(ibid.) を、つまり「自然過程の支配にまかされてある期間」(ibid.) を経過しなければならない。ところで、前述のように、生産過程に合体される自然過程はなんらかの有用性をもっている。当然、この有用性が自然力にあるか、それとも自然的質料交換にあるかに応じ、合体された生産過程の構造も異なってくる。たとえば、有用的自然力を創造する自然過程は動力源として生産過程に合体されるから、労働力は、この有用的自

然力と結合し、倍加された生産力として人間と自然との質料交換を媒介する。他方、自然過程の有用性が自然的質料交換にある場合、その合体された生産過程では、労働力が人間と自然とのあいだの質料交換を媒介するとともに、その成果が自然的質料交換過程にゆだねられ、質的に異なった有用的効果が産出される。

こうした本来の生産過程の場合と同様、「流通過程の内部での・かつ流通過程のための・生産過程の継続として現象する」(II, S. 153.) ような「追加的生産過程」(II, S. 151.) もまた労働過程と自然過程とによって構成される。労働過程が社会的質料交換を遂行し、また自然過程も有用な場所変化を、あるいはそのために有用な自然力を産出すれば、これらの過程はともに追加的生産過程を構成することができる。

質料交換概念をもとにして、物質的生産の構造は以上のように整理することができる。

五 物質的生産と生産的労働

これまでの点を整理すれば、物質的生産過程はなんらかの有用性をもった質料交換過程によって構成され、他

方、物質的生産労働はこうした有用的質料交換を媒介する人間労働力の発現であった。こうした物質的労働の意義が、より一般的には、「未開人」であれ「文明人」であれ、「自分の欲望を充たすために、自分の生活を維持し、再生産するために、自然と格闘する」(III, S. 828. — 傍点引用者) という点にあるならば、物質的労働とはなによりも、生活手段(生活必需品と奢侈品)の生産に充用される労働であると規定することができよう。しかも、「どんな状態のもとでも、人間は、生活手段の生産に要する労働時間に関心をもたねばならなかった」(I, S. 85 — 86. — 傍点引用者) という歴史的事実があるかぎり、この物質的労働が時間の制約のなかで遂行されていることは明らかである。物質的生産にあっては、生産力を一定とすれば、生産時間と再生産時間は比例関係にある。これにたいし、「精神的労働の生産物——科学は、……それを再生産するのに必要な労働時間が、その最初の生産に必要な労働時間にまったく比例しない。たとえば、二項定現を生徒は一時間で学ぶことができる。」(MEW, Bd. 26 I, S. 329.) したがって、非物質的生産物を生産(再生産)する場合の労働時間の意義は、物質的生産物

を生産(再生産)する場合の労働時間の意義とは根本的に異なっている。⁽¹⁾

しかし、労働が物質的である場合にだけ問題とされる物質的労働時間とは、生活手段を生産する時間だけを意味するわけではない。それは生産手段を生産する時間も含んでいる。たとえば「社会の発端を考えてみれば」、物質的労働時間は、「天然に存在する生活手段を取り入れるのに必要な労働」時間と、「そのかたわらで、ほかの自然生産物を弓や石刀や小舟などという生産手段に転化させるための時間」(III, S. 856.)との合計である。もちろん、物質的労働時間をこのように判然と区別できるのは、「生産された生産手段はなにも存在しない」(Ibid.) ような「社会の発端」に限られる。生産された生産手段をもって生産が行われる場合には、「消費された使用価値(生産手段——引用者)の生産に必要な労働時間は、新たな使用価値(生産物——同前)の生産に必要な労働時間の一部分をなしており、したがって、それは、消費された生産手段から新たな生産物に移される労働時間である」(I, S. 215.)とみなされる。とはいえ、この場合も、生産手段と生活手段の合計生産時間が物質

的労働時間をなすという点に変わりはない。

ところで、物質的「労働そのものだけを眼中におくなら、農業や工業などという大きな風への社会的生産の分割は一般的分業、もろもろの種および亜種への生産上のこれらの属の区分は特殊的分業と……名づけることができる」(I, S. 371.)のだから、物質的労働も一般的分業の観点からは、「採取産業、農業、および製造業、……運輸業」(MEW, Bd. 26 I, S. 387.)という物質的生産の四大部門に照応して、採取労働、農業労働、製造労働、運輸労働に分類され、特殊的分業の観点からは、たとえば採取労働は「鉱山業や狩猟業や漁業(処女地を開拓するかぎりでの農業)」(I, S. 196.)における諸労働へとさらに分類されるのである。

物質的労働のこうした具体的形態が社会的分業のもとで明らかとなるのにたいし、個別的分業のもとでは、物質的労働の概念そのものが拡大する。「労働過程が純粹に個人的な過程であるかぎり、のちに分離されるすべての諸機能を同一の労働者が一身に兼ねている」(I, S. 531.)。しかし、「資本関係を形式的に成立させる」ためには「個別資本の特定最小限の大きさが必要で」あり、

「資本のこうした最小限の大きさは、多数の分散している相互に独立する個別的労働過程が一個の結合された社会的労働過程に転化するための物質的条件として現われる」(I, S. 350.)のだから、こうした資本による労働の形式的包摂が結合労働過程を成立させた瞬間から、もはや物質的労働は全体労働者によって体现されるにすぎず、個別労働者はその細目機能を担うにすぎなくなる。とはいえ、「分業、すなわち一機能の自立化は、その機能が即自的に——つまり、すでにその自立化以前に——生産物および価値を形成するものでなければ、そうしたものはならぬ」(II, S. 136.)のであるから、たとえば、「共同的労働過程の本性から生ずるかぎりでの指揮機能」(I, S. 352.)を遂行する指揮労働もそれが「どんな結合的生産様式においても行われなければならない(かぎりにおいてのみ——引用者加筆)生産的労働である」(III, S. 397.)と「うこと」ができる。

以上論じてきた物質的労働としての生産的労働の規定、つまり生産的労働の本源的规定は、人間が生活手段の生産に時間を要費するかぎり、止揚されることはない。もちろん、これだけでは生産的労働の規定にとって不十分

である。資本制生産のもとでは、「資本家のために剰余価値を生産する労働者、すなわち資本の自己増殖に役だつた労働者だけが生産的である」(I, S. 532.)のだから、生産的労働の歴史的规定が他方で必要である。生産的労働の本源的规定が物質的労働としての生産労働にあったとすれば、この歴史的规定は賃労働としての生産労働にある。この後者の規定のたしあつた考察⁽²⁾はもちろん、これと前者の規定との関連、さらに前者の規定が成立する場としての生産労働の規定(つまり、流通・消費・分配等にたずさわる労働と区別されるかぎりでの生産労働)等については、稿を改めて論じたい。

(1) 物質的労働とくらべての非物質的労働の性格については、拙稿「労働のサービズと非物質的労働」、『一橋研究』三卷三号、昭和五三年一二月、を参照。ここでは、非物質的労働のこうした性格が、資本による包摂にあたって、独自の困難を呈示することが示されている。

(2) 拙稿「雇用労働の諸形態」、『一橋研究』二卷一号、昭和五二年六月、を参照。ここでは、賃労働の形態規定を他の類似の労働形態と区別して析出するために、あえて雇用関係(G—A)のもとで、(一)サービズ労働と貨幣収入との、(二)商品生産労働(過渡的労働)と商人資本との、(三)賃労働

(113) 質料交換と生産的労働

と産業資本との交換関係を考察し、これら三つの関係のも
とでも等しく剰余労働が貨幣形態で搾取されうることを示
した。問題は、G—Aの形式的類似に目をうばわれること
ではなく、三つの労働形態を通じての搾取様式の差異を正
しく認識することである。なぜなら、「剰余労働が直接生

産者から、労働者からしぼり取られる形態だけが、いろい
ろな経済社会構成体を、たとえば奴隷制の社会を賃労働の
社会から、区別する」(T. S. 231)からである。

(一橋大学大学院博士課程)